

反すうによる体験の負の意味づけを和らげる看護介入プログラムの評価～抑うつを有する成人を対象としたランダム化比較試験を用いて～

著者	江口 実希
学位名	博士(看護学)
学位授与機関	香川県立保健医療大学
学位授与年度	2021
学位授与番号	26201甲第4号
URL	http://id.nii.ac.jp/1751/00000345/

学位論文審査の結果の要旨

令和4年3月31日

主査 近藤真紀子

副査 國方 弘子

副査 吉本 知恵

学位申請者	所属領域	看護学専攻博士後期課程 実践開発者看護学領域
	氏名	江口 実希
論文題目	反すうによる体験の負の意味づけを和らげる看護介入プログラムの評価 ～抑うつを有する成人を対象としたランダム化比較試験を用いて～	
学位論文の審査結果		合格
〔審査結果〕 本研究の目的は、抑うつ気分を有する人を対象に、反すうによる体験の負の意味づけを和らげる看護介入プログラムを実施し、介入効果を評価することであり、研究方法は、2群間並行ランダム化比較試験（RCT）である。 本研究の価値は、①自己制御困難な反復思考を意味する「反すう」に着目していること、②介入プログラムは、反すうの概念分析・ニューマンの看護理論・マインドフルネスを基盤に、緻密に構築されていること、③変数制御の難しさから看護学領域において導入の難しい、RCT（ランダム化比較試験）を緻密に計画・実施し、主要項目（反すう制御）・副次項目（先読み・深読み・抑うつ症状・べき思考）において、介入の効果が認められていることである。 本学の博士論文審査基準と照合した結果、①RCTの確実な実施は、「研究方法論の妥当性」を担保する。②反すうの悪影響（思考の悪循環による体験の負の意味づけ）により心身の健康が脅かされている状況に対して、独自のプログラムを実施し、それらを緩和できる可能性を示したことは、「学術的重要性および有用性」を担保する。 尚、COVID-19パンデミックの影響により、研究参加者が、統合失調症患者に限定された。統合失調症患者で効果が認められたことは、気分障害の患者への効果が、一層期待できることから、継続的な研究を期待したい。		